

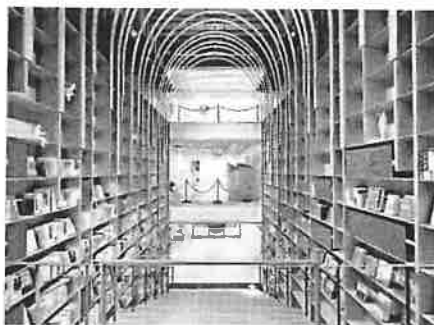
加筆改訂 描写精緻に

文人の
武蔵野

「文人の武蔵野」では、これまで10回にわたって村上春樹の最新作である「武蔵境のありくい——夏帆」その2（「新潮」2025年5月号）と、前作の「夏帆」（「新潮」24年6月号）をとりあげてきました。

前回、8月14日の本紙では、「聴く物語としての『夏帆』」と題して、「夏帆」の物語の初発が、文字の空間ではなく

村上春樹 ①



声の空間——村上春樹と川上未映子の朗読会というライブ

村上春樹ライブラリーの呼称で親しまれる早稲田大学国際文学館。村上作品が並び、「夏帆」の朗読会も主催した（同館提供）

空間——においてだったことを確認しました。そして掲載日のちょうど翌日だったでしょう。か。「夏帆」が改稿されたことを知りました。

「BRUTUS」（25年8月15日号）に収録された「夏帆」を読んでもみると、著者自身が丁寧に入れた「加筆改訂版」でした。朗読原稿を活字化した初出の「新潮」版よりも状況説明が増えて小説的に精緻な描写になり、アリのクイへの言及が足されて続編「武蔵境のありくい」との関係が明確になりました。

物語の概要に変更はありません。26歳の夏帆は、初対面のイケメンに「醜い」「いちばん不美人」「不器量」と言われますが、最初はその暴力

性に気づかず、「ただ純粋にびっくりしてしま」います。

彼女は、外見に執着して縛られる必要のない人生を生きてきた女性でした。何人かのボーイフレンドと付き合い、

親の援助に頼らない生活を獲得しています。自身の容貌が人生に与える影響について無関心で無頓着だったのですが、ある日突然、「病んでいる人間のためにこしらえられたデザインランド」に巻き込まれ、他者から侮辱を受けるのです。

裕福で育ちのよさそうなそのイケメンは、みずからの言動の闇と加害性に自覚的ですが、悪びれる様子はなく、率直でアリのクイの舌の動きのよう

に執拗でした。

絵本作家である夏帆は、ルッキズムの正義と病に対抗するように物語を紡ぎます。夏帆の絵本は特に10代の少女の心を刺激し、夏帆の心をも癒やしてくれたようでした。

しかし、夏帆の自己療養、正義と病に対する抵抗がここで終結することはなく、武蔵境のありくいの導きによって埼玉寄りの足立区から武蔵野へと逃れることになるのです。

（敬称略）

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

*

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。